

論文

描画行動への好悪心理の起因に関する研究
—— 幼児の造形表現と図画工作及び美術科教育法等への芸術心理側面からの問題提起 ——

松下 明生

日本福祉大学 子ども発達学部

Study about the Environment and the Cause of Dislike to Drawing
- Proposal about Education of Fine Arts for a Kindergartner and for a Student -

Akio MATSUSHITA

Faculty of Child Development, Nihon Fukushi University

Keywords：図画工作教育法, 美術教育, 描画の好悪, 発達心理, 芸術学

要旨

本稿では、人間の描画行動について、発達及び教育心理もしくは描画心理と教科教育などの様々な側面から研究を行い、「人の描画行動に対する意識とその変化、それらの起因に関する環境等」を調べ、それぞれに向けての問題提議を行っている。2011～2019までの期間で、2272人（有効回答）の被験者からのアンケートによる調査を実施した。被験者は現役の小中学生から中学生、短期大学生、大学生、成人として教員免許更新講習受講者等から、学部学科専攻による結果の差異についても一部を考察内容としている。これまでは、「人の成長とともに、ある時期から描画行動に転機が起こり、次第に興味を喪失する」という定説が一般的であるものの、実際には人の心の中で何が起きているのか、そしてその原因は何であるのか等を結果から読み取り、考える機会とした。

筆者は、主体である人間が行う「描画行動と絵画制作」に的を絞り、「好き嫌い」というキーワードで調査を行い、芸術としての描画行動の持つ意味や教育美術の目的と成果、発達心理としての描画による好悪心理等を統合しながら、今後の研究に向けての問題提議としている。

1. はじめに

人はなぜ誰から教えられなくても、生まれて間もない子が、お絵かきを始めることができるのであろうか。自発的に幼児がお絵かきをしている姿は、なぜいつも幸せそうになされているのであろうか。小学校での「図画工作科」の授業では、現在でも児童の好きな教科の上位を占めている。

それが何故か、学年が上がるに連れて、好きなお絵かきが次第にそうではなくなっていく。このような状況は、自然な発達の流れとして許容されるものなのだろうか、子どもの発達や成長の中でも自然な成り行きとして容認しても良い事象なのだろうかという疑問が起こらないはずがない。そして、中学3年生になると高い比率で、生徒は「美術科」を好きな教科として受け止めていないの

ではないかという危惧が生じ、それを確かめるために、児童から大人まで2011～2019年の期間、のべ2272人(有効回答数)からアンケートによる調査によって人々の記憶の声を得ることができた。美術教育の現場で、実際には学校の教室の中で、どのようなことが起こっているのか、そこから見えてくる現在の美術教育の問題や、教育者が誰も言わなくなってしまった大切な教科観を取り上げる必要性を感じて久しい。

本稿ではアンケート結果などの人の声を根拠として問題提議を行っている。これからの美術教育に関する問題点や課題を、「子どもの描画」を軸に、美術造形教育が果たす役割についてまで考え、教育の方法論に関する定説への未解決な課題を提言する必要がある。

2. 人の描画発達に関する理論について

2-1. 現代の描画発達に関する諸問題

今回行ったアンケートでは、描画行動が嫌いになった理由として、「思い通りに描けなくて恥ずかしかった。」「思い通りに描けなくて、自分で他人と比較して下手だったから。」「(先生が)なんでもいいよって言ったのに、それじゃないって言われた。」「アイデアが出てこない。」「先生が怖いから。」「絵心がないって言われた。」「イメージ通りに描けない。」「自由にやったのに成績が悪かった。」「描き方(技法)がわからない。」など、枚挙にいとまがない。

そもそも、「絵を描く」という行為は、なぜ人は絵を描くのか?という疑問にたどりつく。人は生まれて間もない概ね1才ごろになると、指の骨格等の機能的な発達によってオイルパステルなどの描画用具を自分の意志で握ることができるようになる。やがてそこに絵画制作の支持体である「紙」などがあれば、何かを描こうという思いがなくても、無意識な運動の軌跡として跡を残すようになる。これが当該の人にしてみれば初めての「人の描画行動」ということである。

心理学的な最近の研究では、浜谷(2015)は「今日、子どもたちが持っている絵を描くことに対する苦手意識の増加と低年齢化の背景には、心理学的な理論が保育実践に与えた影響があると考えられる。」と述べている。Luquet(1927)やFreeman N. H., Janikoun, R(1972)たちの実験を引用して「知的リアリズム」と「認知的リアリズム」を挙げて概説していて保育実践の在り方についても述べている。人が何故絵を描くのかという疑問に

ついては、そのような標題の図書や文献も複数冊刊行されているものの、これまでに納得のいく説明に至るものと出会っていない。発達の側面で言うと、苦手意識を持つことや描くことに抵抗感を抱くようになる時期があるという様々な学説があり、日本国内でも受け止められている。

2-2. ハーバード・リードとローウェンフェルド

ハーバード・リード(1893-1968)は、子どもの描画の発達段階を以下のように説いている。なぐりがき(スクリブル)2才-5才……目的のない線描き、線:4才……視覚的制御の時代、説明的象徴主義:5-6才……粗雑な象徴的図式の時期、説明的象徴主義:7-8才……描画は視覚的というより論理的な時期、視覚的な写実主義:9-10才……記憶や想像により描く段階から、自然を見て描く段階へと移行する時期、抑圧:11-14才……幻滅して意欲を失ってしまい、言葉を通じた表現の方へ移る時期、芸術的な復活:15才から……描画は初めて真に芸術的な活動として開花する時期。

この中で、本稿のテーマである「描画に対する好悪の心理」と関連のある部分での記述としては、「抑圧」の時期において、描画については「対象を再現しようとする試みの進展は、骨が折れるものであり遅々としている。」等と、その難しさについて淡々と記述されているにすぎない。

V. ローウェンフェルド(1903-1961 オーストリア)は描画の発達段階研究に於いて世界で最も影響を与えた研究者の一人であり、現在の日本の美術教育や教員養成の現場などの様々な造形的指標となっていて、とてもわかりやすく受け入れられている。ここで概説すると以下ようになる。なぐりがき:2-4才……無統制な運動、線の運動の協応、運動的思考から想像的思考への変化の時期、様式化前:4-7才……再現と再現された物との関係の発見、様式段階:7-9歳……反復による概念の発見が様式になる時期、写実主義の開始:9-10才……青年前期の危機としてギャングエイジと命名もしている時期、疑似写実主義の段階:11-13才……発達した知能で無自覚で写実的な制作の時期、決定の時期:13-17才……青年期の危機でもあり、3つの型に分類出来る。a. 視覚型(50%)、b. 触覚型(25%)、c. 中間型(25%)

V. ローウェンフェルドの著書「美術による人間形成」

(1964)の中で、本稿のテーマである部分としては、「展示と競争」という章で、「成長とは、その人自身の基準と成績とに対する不断の競争である。」として「子どもは、自己の水準よりも上回っている他人の成績を理解することも、またそれらと対抗することもできない」「親や教師が、子供自身の成績に対して払われたかれ自身の個人的努力を認めてやらないならば、その結果、嫉妬のような病弊が生じる」とある。子どもの描画について、上記下線部の「自己の水準よりも上回っている」とは、自分の描く水準よりも他人の絵の水準が上回っているということの理解ということであろうが、それでは、作品至上的な前提となっているという理解となっていて、ここには議論の余地があることは否めない。一方、同じ章で、「美術教育の重要な目的の一つは、子どもの人格を構成している個人的差異を伸ばしていくことである。それをおさえるのは、子どもの人格を抑制することになる。」として「美術教育は、完成品ではなく、自由な自己表現の過程を重要視する。完成品を基礎にした競争は、どのようなものでも、子どもの注意を、制作過程から完成品へと、直接、そらせてしまうに違いない。」とまとめている。この部分の下線部は、現代の美術教育の方法として評価され実践している精神的基軸でもある。しかしながらこの章の矛盾としては、作品展示の必要性を説きながら、展示という行為では「完成品」が基準であり、子ども自身は他者との比較にさらされたり、比較された他者（教師を含む）からの思いもよぬ言葉にて批評される言葉に傷をつけられることも少なくないのである。そういうこともあってか、著者は「子どもは揭示された作品を見る場合、他人の作品を見て楽しむというよりも、自分自身のものを見る方が好きである。」とも書いている。

また、V. ローウェンフェルド（以下、ロ・ウェンフェルド）は、それぞれの発達段階における教育的な刺激についても研究しているが、なぐりがきの最初の段階においては、活動を進行させるために、教師が与える励まし以外の刺激は必要ないと言い切っている。どんな技法でも、子どものそれぞれの発達段階おいての要求に合わないものは用いられるべきではないとも記述している。

様式化前の段階で「子どもは自分の描いたものが本物に少しでも似ている（関係がある）」というだけで、十分に精神や情緒に満足を得ている。」とあるこの時期は、現在の日本では幼児期から小学校へ入学した低学年まで

の時期でもある。この時期は、なぐり描きの意味が消失し、再現への要求が新しく始まっていく過程となり、物の見方を固定化させてはいないので、同一物を表現するのに非常に多くの形態象徴を用いた表現となる。それらの試された様々な方法の反復により個々の様式については、ある程度の固定化が見られる時期であることはわかっている発達段階である。しかしながら、この章で言われている「自分の描いたものが本物に少しでも似ている……」とある部分には、本物に似ているとした事は「上手い下手」という作品の結果による視覚的な完成度につながった評価という疑問につながってしまい、それでは問題を解決することができなくなってしまう。

次に、ギャングエイジと言われる写実的傾向の芽生える9才から11才頃は、描画以外についても様々な問題を抱える時期でもあるが、描画の発達という視点で述べるとすれば、様式による絵画表現からいわゆる写実的に移行することが可能な時期でもある。子ども自身にしてみれば、これまでは幾何学的な簡単な形態の繰り返しやその描写で充足されていた認知的もしくは精神的な内面が満たされなくなってしまうことが大きな要因であることは自明である。この時期は、自身の創作力に対する子どもの自信がはじめて動揺する時代とされていて、以前に使われていたような幾何学的線は、服やドレスの特徴を表すのに不適当な手段であることに気付くのである。子どもは、自分の欠陥を発見し、その結果、いっそう写実的な再現を目指そうとするのである。これは、心理学的にも「自己意識の拡大」という成長過程のなかでは、起こる必要十分な結論であると言える。この時期は、子ども自身が批判的意識的になっていて教育者是对応に苦慮するのである。子どもが制作をするのにその作品を恥ずることなく、誇りを持って眺めるようにさせるにはどうしたらよいか、ということが重要な問題となるとしている。この段階ではじめて、制作過程の重視よりも、完成品をだんだんと重視するように注意の転換が行わなければならないとのことである。これを解釈すると、幼児期の造形活動における教師の立ち位置や扱い及び指導の方法を、全く変えていかなければならないということが記載されていることになる。これは作品の完成度について重要視するという、旧態的な方法のように現代の我々にとっては受け止めてしまいかねない。美術上の刺激の章で、「自分の「子どもっぽい行動反応」や、「無統制の想像活動」をいきなり批判的に意識するようになったと

すると、その結果の大部分は衝撃となる。この衝撃の結果の一つとして、子どもはかれの創作活動を中止するようになる。かれは「何も描けなく」なる。この批判的意識が「無力な」子どもっぽい態度に気付かせるからである。いきなり大人の態度を意識するようになるために、絵画表現が、「子どもっぽい」「馬鹿げた」ものに思われてくるのである。」と周囲の大人や教育者に向けての重要な事項として提言されている。

人の成長は、早く、それも突然に気付くことがある。昨日まで出来なかったことが、今日になっていとも簡単にやって見せる子どもの姿に感動を覚えた経験は一度や二度ではない。身体的な発育では、物理的に少しずつ、確実に起こるものであるが、精神的・心内的にもしくは能力的には、仮にグラフ化したとして、その成長を表すには一直線ではなく、単純ではない曲線になる場合が多いだろう。但し、精神的に成長するという事は何を指してそうなのかは指標を見出すことの方が難しいかもしれない。人の心や能力は、成長するばかりではなく、時として後退する場面もあるように思う。

3. 描画行動（絵画制作）についての好悪状況調査

3-1. 調査方法

被験者は各々の過去を振り返り思い出し「お絵かき」についての各質問に回答する。各自の思いや感想、もしくは今伝えたい事柄について記述をする。その際、それぞれの時期にて自分のお絵かきに対して「好きだったか、きらいであったか」を棒グラフにして塗り込む作業に任意に協力をしてもらう。

手続き：1. 小学生や中学生には1学期、短期大学生・大学生には美術造形の授業初回のガイダンス時に、成人（教員免許更新講習受講者）には講習最後に、目的を公表してアンケート協力の要請をして任意に回答をする。
2. 児童・生徒・学生には成績には無関係であることを伝え、思っていることをすべて書いてもらう。
3. 記載者の氏名を記入した場合には、後に個別に質問を行うことがある旨を了承してもらう。
4. 回答時間は制限をせずに、授業時間内に書ききれなかった場合には後で提出をする。
5. 質問はQ1. からQ9. までとして、有効回答は無記名にて公表することがある。

3-2. 短期大学生（浜松学院大学短期大学部幼児教育科 2009 - 2011 年度入学生：有効回答 計 425 人）

アンケート Q1「あなたはお絵かきについて、好きだったかどうかを棒グラフにしましょう。塗りつぶして下さい。」

図1.では、静岡県下の短期大学に於いて入学された3年間分の学生から得た回答であり、この図は100%換算にて「好きな度合い」をグラフ化したものであり、本稿筆者が研究論集に投稿したものである。幼児期には、ほぼ全員が好きであった「お絵かき」が確実にそうではなくなっていくことを可視化している。緩やかに見えるが、小学校入学時と中学校入学時に、その段差が大きくなっていることにも着目したい。

3-3. 愛知県内の現役中学生への調査

図2.の調査は図1.と同様に、浜松学院大学短期大学部の研究紀要に掲載したものであるが、図1.と同じく、好きな度合いは確実に右肩下がりとなっている。上記短期大学の学生回答と比較して、中学生になってからは下がる度合いは少ない。図1と図2によって、次第に好きではなくなっている状況を確認している。

3-4. 名古屋市内の短期大学学生への調査

次に、愛知県名古屋市の短期大学1年生の経年調査(2013-2018) 結果をグラフ化した。

図3.から図8.は名古屋市内の短期大学1年生の6年間の調査である。毎年概ね、お絵かきが好きであった幼児期から確実にそうではなくなっていく状況を確認することができる。若干ではあるが幼児期から小学校へ入学した時と中学校へ入学した時の減る割合が、他よりも大きくなっていることがわかる。年によっては若干の違いがあるのは、クラス観やそういう集団であるといういわゆる、クラスや学年の特徴による違いと言っても良いのであろう。例えば、他の年度でも同様な年があるが2018年度の図8.では、幼児期には85%が「大好き・好き」であったのに、中学生になるまでには大幅に下がっている。中学校1年生で最も「大好き」の割り合いが少なく、「大好き・好き」の合計数での割り合いは、中学校2年生が最も少ない。ところがこの生徒たちは、中学校3年生になって「好き」が回復しているのである。同じ生徒群であるにも関わらず、この変化には何か隠された原因もしくは環境に違いがあると仮定して、各々が

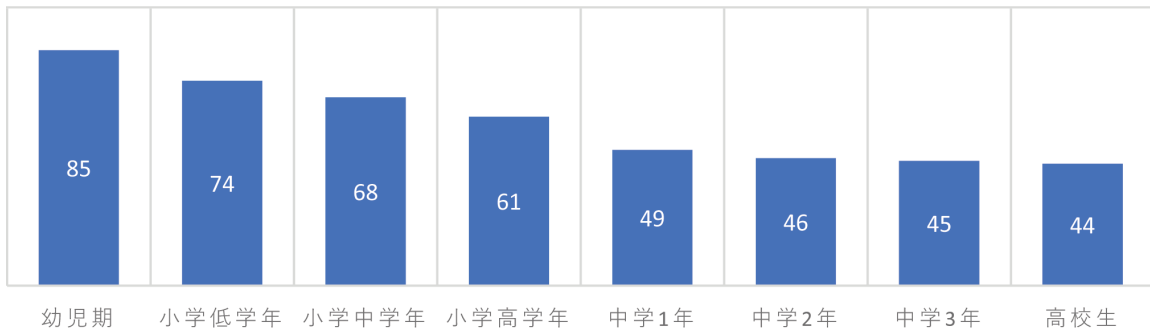


図1. お絵かきが好きな人数比 (%) (2009 - 2011 浜松学院大学短期大学部入学生: 425人)

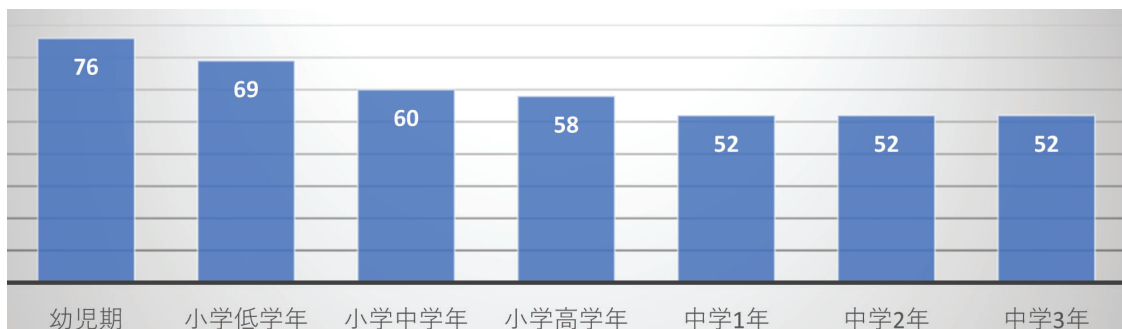


図2. お絵かきが好きな人数比 (%) (2011 愛知県大治町立大治中学校: 38人)

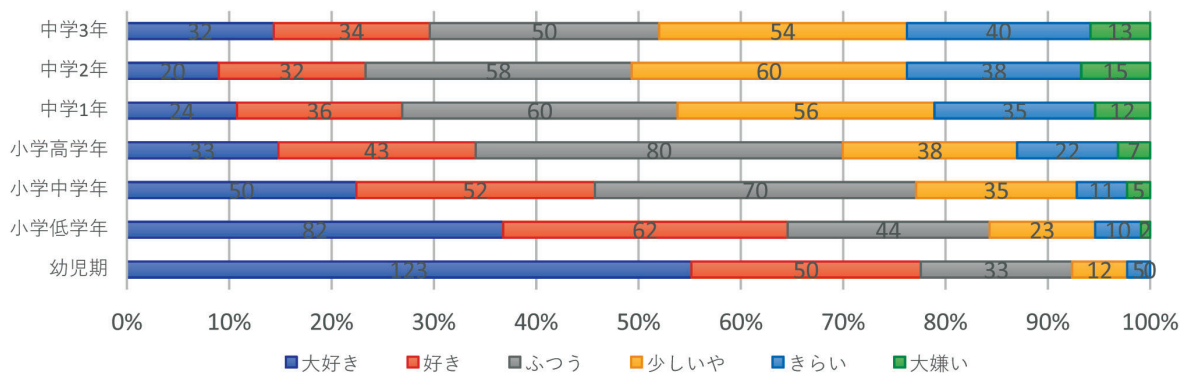


図3. お絵かきに対する好悪についてのアンケート (2013 名古屋柳城短期大学1年生: 有効回答 223人)

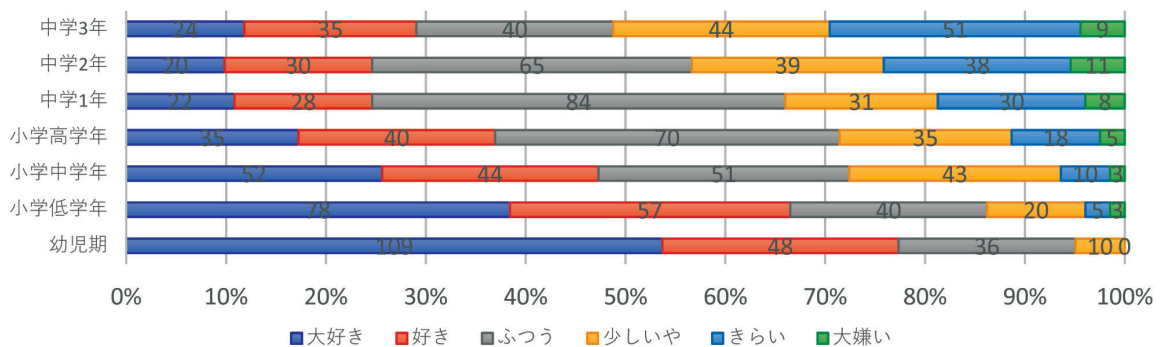


図4. お絵かきに対する好悪についてのアンケート (2014 名古屋柳城短期大学1年生: 有効回答 203人)

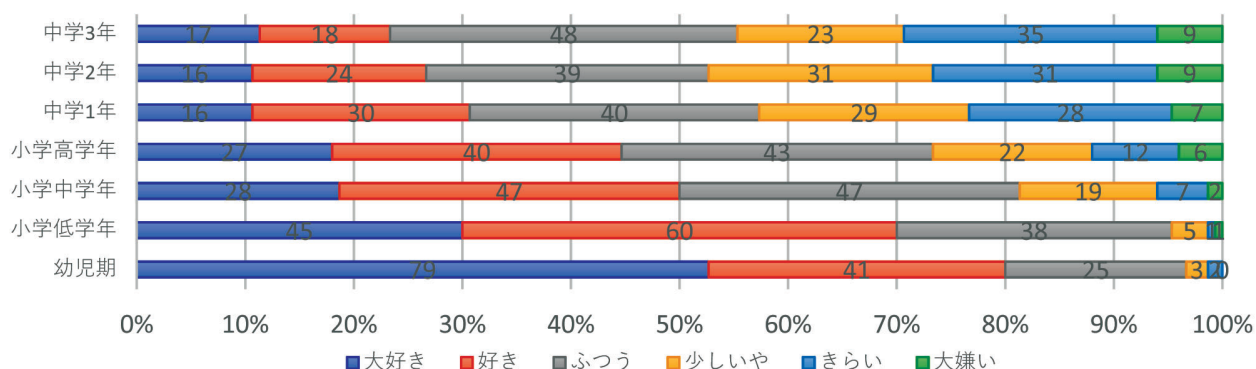


図5. お絵かきに対する好悪についてのアンケート (2015 名古屋柳城短期大学1年生:有効回答150人)

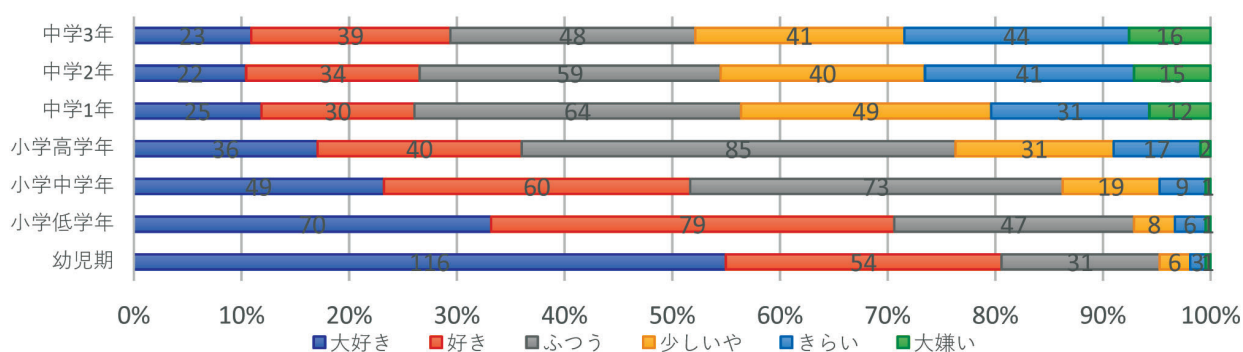


図6. お絵かきに対する好悪についてのアンケート (2016 名古屋柳城短期大学1年生:有効回答211人)

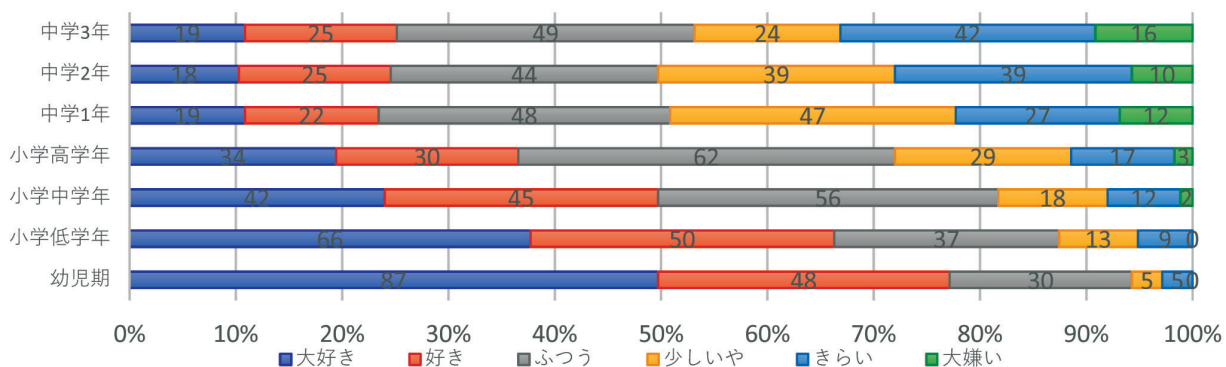


図7. お絵かきに対する好悪についてのアンケート (2017 名古屋柳城短期大学1年生:有効回答175人)

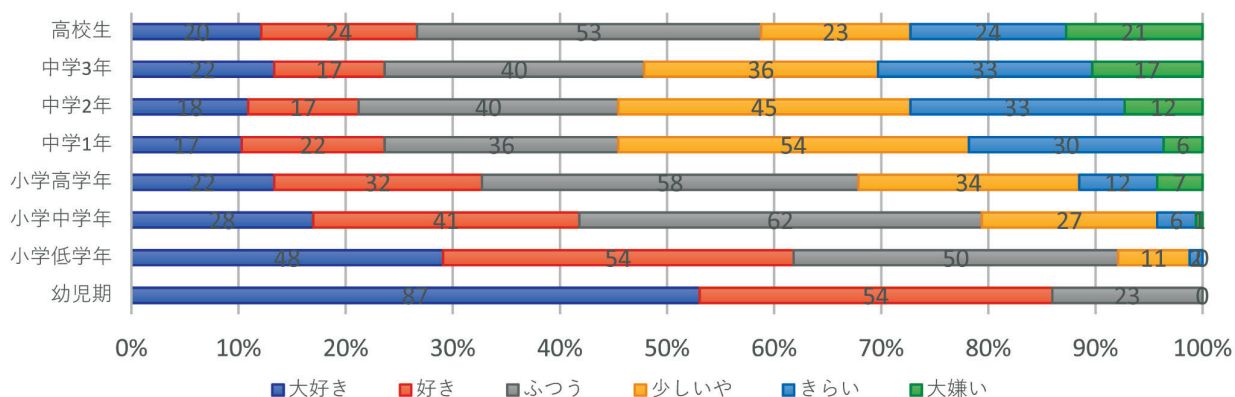


図8. お絵かきに対する好悪についてのアンケート (2018 名古屋柳城短期大学1年生:有効回答165人)

書いたコメントを調べることにした。

調査した全年度に共通に言えることは、すべての年度でほとんどの生徒たちは、中学生になって教科「美術」という科目についての記憶がマイナスイメージになっている。回答された中から嫌いになった理由コメントを紹介すると「絵が本格的になって思い通りに描けない。(中2)」「思い通りに作れないことが嫌だった。(中1)」「周りの子が上手かったから(中2)」「バカにされ笑われたから(中1)」「難しかった(中1)」「考えた絵と違った(中2)」「下手すぎていやだった。(中1)」「わりと真剣に描いたのに先生にバカにされた(中2)」「イメージができて描けない。(中3)」「絵が下手だから画用紙にかいて見られるのが嫌だった。(中1~3)」「絵心がなさすぎ。(中学)」「アイデアが浮かばない(中学)」「時間がかかる。(中学)」など、一部を掲載した。

上記の疑問の中の「3年次に好きが回復した図8の2018年度学生」では、中学校1年から2年生の時期が好きではない底の時である。その後3年生になって(好きと)回復している数値の理由を読み取れる記述があるので、嫌いになった理由の後に、以下に順次紹介する。

「先生のひいきがすごくて、先生自体が嫌だった。(中2)」「担任が美術の先生で、授業以外のグチを聞いてくれたから話したのに、成績下げられてウザくなって嫌いになった。(中2)」「部活の副コーチが美術の先生で、部活のことを授業中まで引きずって怒ってたりしていたから。(中2)」「今までは数字で絵や工作を評価されたことがなかったので、低い評価をされたとき傷ついたし、自信もやる気も失ってしまった。(中2)」「自分の塗りたい色で絵を描いていたら横から先生が来て、ダメだしされた後、勝手に色を変えられてそのまま塗られた。(中1)」「先生がこわくて、そこからきらいになった。(中学)」「写生大会(中1)」「風景画で、絵が病んでるって先生に言われた。(中2)」「絵の上手下手で成績が決まったから。(中1.2)」「自画像でみんな上手で自分は思い通りに描けなかった。(中1)」等と嫌いになった理由を書いている生徒のほとんどは、嫌いになったままであるが、どのようにして克服したのかという問いに回答して、嫌いな思いを挽回したのか一部を紹介する。

「先生が変わったので、楽しくなりました。」「みんなと同じ絵ではなく、オリジナルキャラクターを生み出し、いい意味でみんなと違うのを描いて満足する。」「もう人をリアルに描かないようにしようと思った。」「先生に言

われたことは、気にしないで自分の好きなように描いていた。」「克服しようとは思いませんでしたが、母がほめてくれるので描くようになった。」「まあいいやってわりきった。」「勝手に変えられて、凄く悔しかったから、1から書き直した。」「という具合である。挽回をどのようにしているのかについては、悲しいかなそこには、教科を指導しているはずの教師が出てこないのであるが、それはいったいどういうことであろうか。被験者はそれぞれ違う中学校出身なのだが、当該年度の調査では、当時の指導教員についての記載が目立っている。これによると、教師が苦手で指導(声掛け)などによってさらに傷付いてしまっている。それよりも、本人が思うように描きたいという願望を充足する描き方は教えてもらっていないということも推測できる。美術の担当の先生が変わったので、嫌いな気持ちが修正できて嫌いな気持ちが好転した等のコメントには衝撃を受けることになり、またそこには大きな疑問符がついてしまった。絵の前に苦悩している生徒に対して、教師の苦労も同時に見えてくるのだ。ハーバードリードはこの「抑圧」の時期(11-14才の時期)において、描画については「対象を再現しようとする試みの進展は、骨が折れるものであり遅々としている。」等と、その難しさについて淡々と記述していて、子どもも教師も難しい時期であると言えよう。

3-5. 4年制大学の学生への調査

以下は、名古屋市内のN女子大学4年生への調査の経年調査である。保育職を目指す学生たちであり3-4.の短期大学1年生とは、少しばかり年齢の層が上がることに着目するも大きな違いはなかった。

小学校に入学してある時期と、中学生になってからの二つの箇所で、好きな思いが急減するという結果も同様となっている。

N女子大学4年生についても、概して短期大学生の結果と比較しても同じような結果となっている。幼児期に於いての好き(大好き・好き)の割合は概ね8割に届くレベルであり、そこから成長とともに確実に減っていることがわかる。それと同時に、相反するように嫌い(大嫌い・嫌い)のレベルが上がっている。N女子大学の4年間の経緯で比較をすると、2018年度はアンケート回収できた人数が少ないからという理由ではないと思うのだが、他の年度に比べて「好き」のレベルが圧倒的に少ないので、コメントされた中身を見てみよう。

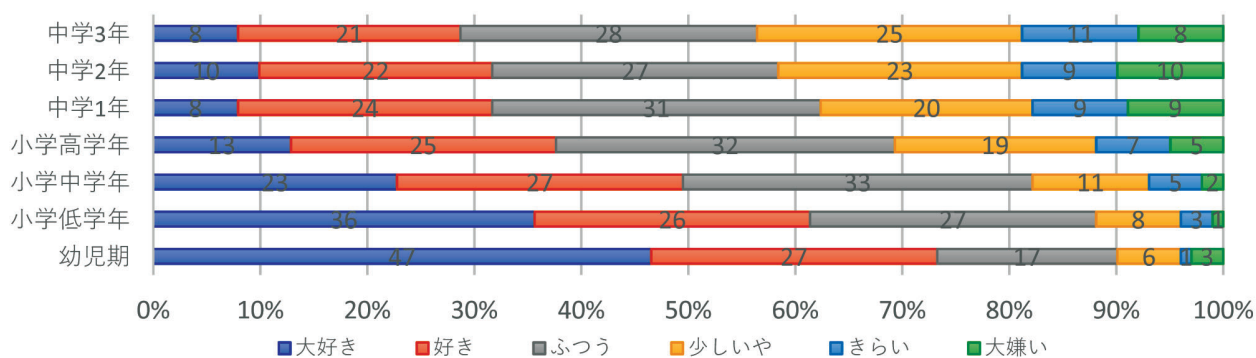


図9. お絵かきに対する好悪についてのアンケート (2015 N 女子大学4年生: 101人)

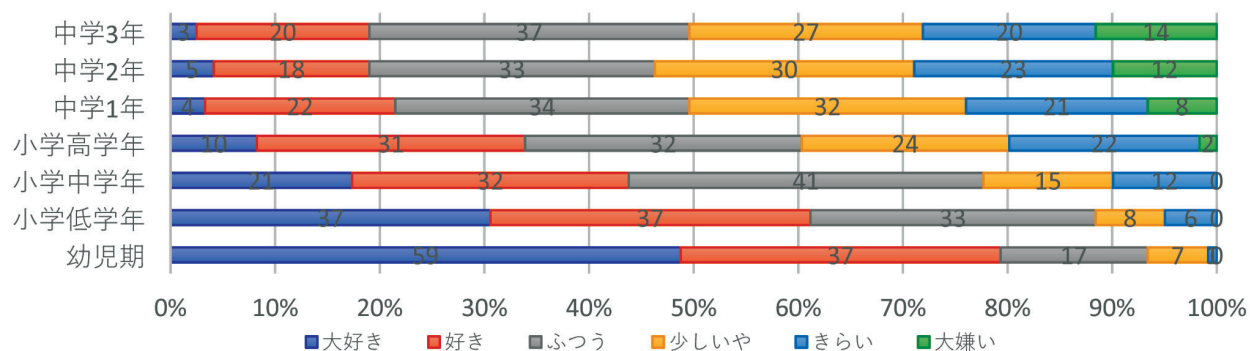


図10. お絵かきに対する好悪についてのアンケート (2016 N 女子大学4年生: 121人)

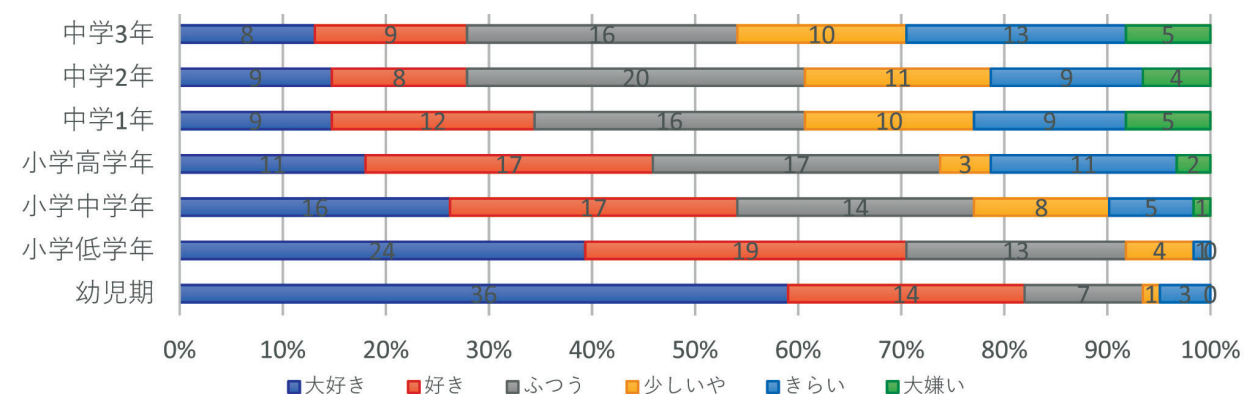


図11. お絵かきに対する好悪についてのアンケート (2017 N 女子大学4年生: 61人)

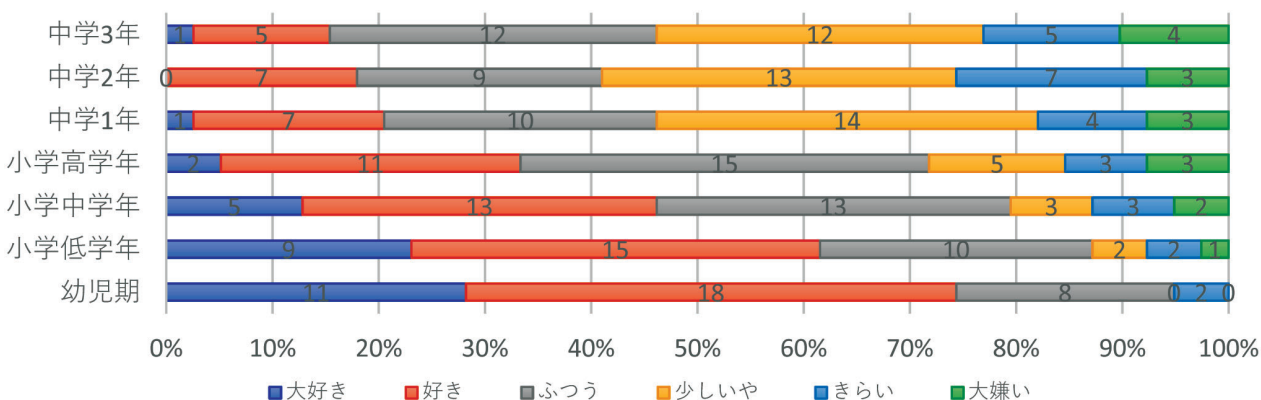


図12. お絵かきに対する好悪についてのアンケート (2018 N 女子大学4年生: 39人)

アンケート Q2【お絵かきや工作・美術の中で、嫌いになったりしたことはありますか？ その嫌いになったときはどんなときでしたか？ 具体的に書いてみてください。】

回答

【小学生】

「お母さんに下手だねって言われた。」「紙粘土に色を塗るときに茶色をつかったのが暗いと言われた。」「デッサンの時に、仲の良い友達がみんな上手くて、自分だけ手が進まなかった。」「自分の顔を描いたが、先生に直されて嫌だった。」「小2の時、友達に何をかいているのかわからないと言われた。」「お姉ちゃんは上手だねって言われた。」「写生大会の時、賞をとることができず、その時に絵は上手下手が重要であることを知った。」「高学年時、市の展覧会で飾ってあった作品が日光に当たって溶けていて、後日、友人に笑われた。」「1回も入選しなかったから、廊下とかに展示して下手だからいやだった。」「図工の成績が悪かったから、先生が怖かった。」「夏休みの宿題で、どこから描けばいいかわからないし、全く似つかなくて、とても恥ずかしかった。」「人より時間がかかるし、めんどくさい。」「小4の時、スケッチで周りの友達の作品を見て自分は友人のように上手く描けないと落ち込んだ。」「水彩絵の具を使うとき、自分の満足のいくように塗れなかった。きれいに塗るのが難しくて好きではない。」「小4の時、写生大会で自分なりに描けたとかんじていたが、担任の先生から指摘をたくさんされ、自信をなくした。」「夏休みの宿題で、絵の具で色を塗るのが上手にできなくて、作品が台無しになった。」「風景画で自分のイメージ通りに描けなくて嫌になった。」「小6の時、学校外写生で、風景を描いているとき、先生に『電柱の高さがここから見て同じ高さなのはおかしいよね』と言われてショックだった。」「小5の時、先生が自分の描いた絵にたくさんダメ出しをしてきたから。」「小6のテーマに合わせてイメージで絵を描く授業で、何も案が出てこない。イメージも何もなかったから。」「小6の作品展で、遠近法のやり方がわからなくて変になり笑われた。」「恥ずかしがりやなので、絵など人に見られるのが苦手」

【中学生】

「思うように描けなくて苦しんだ。」「風景画などリアルに描くというのが難しい。」「作品作りで、アイデアが

思いつかなかった。」「イメージがわからなくて描き出しに迷って時間に追われた。」「中2の夏休みの宿題で、防火ポスターを描くのがめんどくさくて後回しにした。」「中1の時、学内の写生で描きたい場所がなくて、おもしろくなかった。」「成績が悪かった。」「周りよりも、アイデアがうかばなかった。」「友人がモデルになって描くこと。」「友人が上手に描いていて、技術力の差をかんじてしまった。」「自画像が思い通りに上手く描けなかった。」「美術の描く授業で、周りに比べて下手すぎて恥ずかしかったから。」「中2の時、技法を使った絵で、訳がわからないし、できるまで時間がかかる。下手だった。」「自画像を描くときに悪口を言われた。」「中2、3年の時、色塗りが下手でできなくて嫌いになった。」「中2の時、自分の思い通りにできず成績も下がってしまったので、不得意を感じるようになった。」「上手く描けないし、先生も苦手だった。」「上手く描ける子がうらやましかった。」「中3の課題で、スプーンに映る自分の自画像を描くとき、顔や背景がゆがんでしまうから難しかった。」「上手な人が、まわりにおいて、自分と比べてしまって落ち込んだ。」「デッサンやレタリング、自画像で、どう頑張ってもうまく出来上がらないし、成績もずっと2だったから。」「成績が悪かったから。」「中1の時、友人をデッサンする授業で、友人の顔のパーツも体のバランスもうまく描けなくて不細工になるから。」「アイデアとか自分で考えて描くものが苦手だとわかったから。」

以上のように、2018年度の39人だけでも、このように「お絵かきが好きではなくなる理由」として記述されている。その理由は人によって千差万別であり、嫌いになった程度や、それが瞬間であったのか、または長い期間嫌いになってしまったのかについては、個別に面談してみるとさらにさまざまであることがわかる。それら一人一人の、お絵かきに対する思いは、それぞれの思い出の中にあり、例えば担任や美術教師によって掛けられた言葉の文言を、成人してもなお、記憶に留まり負の記憶となってその人の好悪感の感情を左右していることについては改めて考え直さなければならない。

3-6. 2019 日本福祉大学子ども発達学部：有効回答

205人（＊保育専修以外）の調査から

図13.の調査対象は教職課程で教員になることを目標として精進している学生である。彼らは、小学校教員に

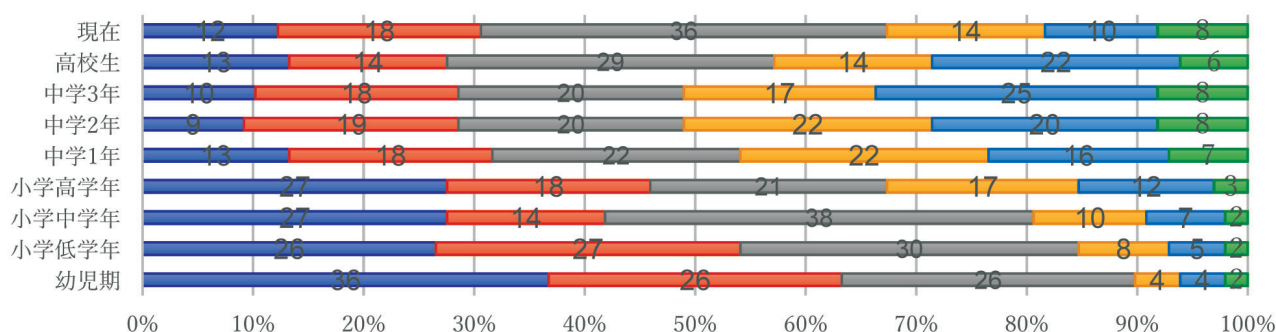


図13. お絵かきに対する好悪についてのアンケート (2019 日本福祉大学学校教育コース1年生: 98人)

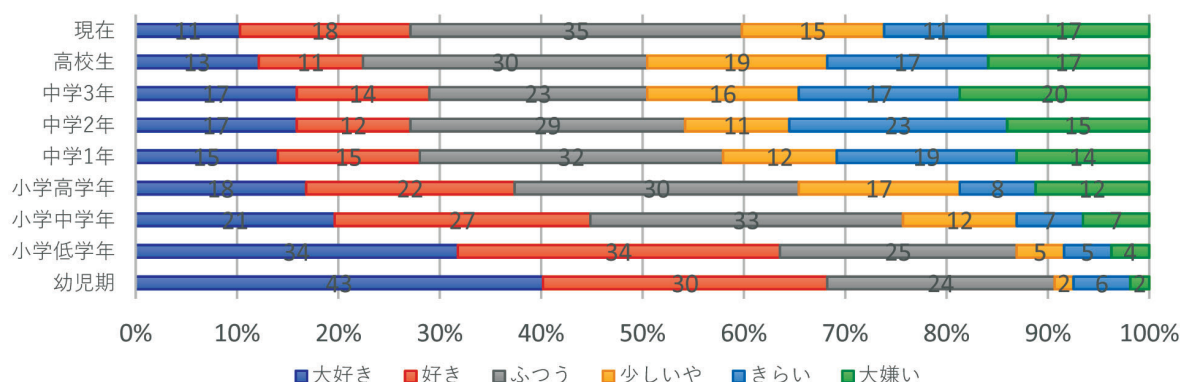


図14. お絵かきに対する好悪についてのアンケート (2019 日本福祉大学心理臨床コース1年生: 有効回答 107人)

なる際には図画工作科を教え、児童の評価もするし成績をつける立場になる、そういう学生層である。一方、図14.の対象学生は、教職課程ではない心理臨床の世界を学び心理関連の資格を取得することも視野にしている学生層である。こちらの学生たちは図画工作などの子どもの絵画指導をする学びは必要がない学科でもある。本稿の調査対象は保育や教職を必修としている学生（短期大学生・4年生大学生）が殆どであるが、この図14.の被験者は、学校の先生にはならない立場として「一般」に属する立ち位置でもある。このことから、図14.から読み解くことは大変重要であるとも考えられる。しかしながら、この図14.のグラフからは、他の教職選択の学生たちと比べても特筆して述べる違いが見当たらない。幼児期から確実に「好き」という学生比率が下がっている。そしてここでも下がる曲線が、「幼児期 小学校期」と「小学校期 中学校期」の2か所で好きの割合が下がっていることを確認することができるが、図13.の教職課程の学生の方が顕著に表れていることがわかる。

3-7. 教員免許更新講習の参加者へのアンケートから

2018年7月に、名古屋柳城短期大学に於いて教員免

許更新講習が開催されて、講座終了後に任意に協力を得た。有効回答は76人であった。出席者は、50代までと幅広く、幼稚園教諭などの保育職として現役で就労している層も多い。これまでの学生向けの調査と違う部分では、大学を卒業して時間が暫く経っていることである。そこで、現在は「お絵かき」についてどのような思いであるのかについての記述も求めた。

幼児期の記憶が遠い年齢層も含んでいるので、その部分の確からしさについて明言することは出来ないが、ここでも定説通りに幼児期から確実に中学校3年生の義務教育を修了する学年までに好きと回答した人の比率が下がっている。ここでの特徴的な部分は、現在の好悪心理は中学時代よりも圧倒的に「大好き・好き」が増えている。職業的にも、造形活動の支援をすることや積み重ねてきた経験によるものだと思う。現職の教員・保育者として日々、子どもと造形活動を組み立てて実施しているのだから、嫌いなままでは業務の支障にもなりかねないのである。それは、Q9の質問に回答された文面からの推測に過ぎないが、教職者の言葉として「～したい。」というふうな回答が目立ち、造形表現についての経験も豊富になって全体にポジティブな思いが伝わってくる。

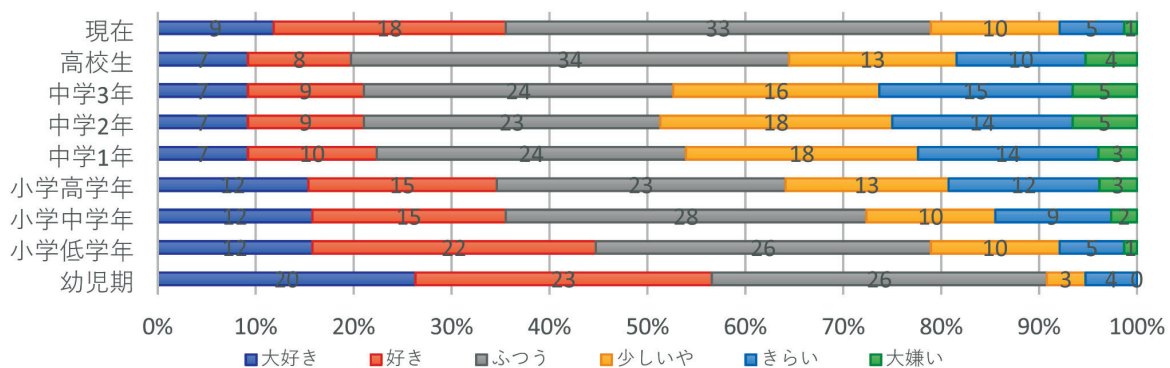


図 15. お絵かきに対する好悪についてのアンケート (2019 幼稚園教諭免許更新講習にて: 有効回答 76 人)

図 15. の現在では、「大好き・好き」が 27% に復活されていて、当該層の小学校期と同程度の数値に戻っている。

アンケート Q9 「何でもいいですから、図工や美術について今思っていることを書いて下さい。」

【回答】

「子どもたちと絵画や製作を行ってきて、こちらが勝手に理想を持つのではなく、個々の発想や表現を認めていくべきだと思っています。」「苦手意識がつかないように、子どもには経験させていきたいと思う。」「子どもにはのびのびと表現することを楽しんでほしいと思います。学校での図工や美術は好きではなかったが、現在壁面製作などは嫌いではない。」「園児と造形して一緒に楽しく思える機会を増やしたい。」「幼児期に経験する機会を多くつくりたいです。」「現場に出ると、美術について勉強することが少なくなるので意識して美術館や造形に触れるように努力したい。」「美術は嫌いだったけど、今、子どもと作る工作は大好きです。」「美術で成績をつけられる時はいやだったが、保育者になって子どもたちと製作するようになって楽しくなった。」「楽しく絵を描ける方法が知りたいです。」「子どもたちに、たくさん絵を描いてもらいたい。」「自分の子も、今ちょうどデッサンのように物を見て描くことにはまっていて、日に日にとても上手になっていきおもしろいです。」「学生時代はあまり図工や美術は好きではなかったが、保育士になり経験したことで苦手意識はなくなった。」「見て楽しい美術イベントに行っています。」「絵が上手になりたい。」「この仕事をするのならもっと絵が上手に描けると良かった。」「自由な発想を認めてのびのびと表現できることを許してくれる大人がいると図工や美術は楽しいと思います。」

「美術室は暗いイメージしかなく、もうちょっと楽しめたら良かったなと思いました。」「今は、人それぞれ作品も個性があって良いと思うが、小さい頃は、人と比べて自分を評価していたように思う。」「上手ではないですが、好きです。」「作っていると、あっという間に時間が過ぎていく。」「時間さえあれば絵の具を持って、風景画を描きに行きたいです。」

3-8. 小学生 (5 年生 6 年生から) の声 (2019 愛知県津島市立高台寺小学校)

図 16. では愛知県の現小学 5 年生と 6 年生から回答を得た。小学生 5 年生 6 年生と合わせて 79 人の有効回答で、グラフは 5 - 6 年合計人数にて幼児期から現在 (小学校高学年) までの好悪の状況について表している。本稿のこれまでの他の調査では成人してから幼児期や小学校期はどうであったかという遠い記憶をもとに思い出して記入する形式であったが、このグラフの被験者は、今まさしく現役の小学生であり、今の考えや思っていることを表している。ここで特徴的なことは、お絵かき (図工) が「好きという児童の割り合いの変化について、幼児期から小学校中学年にかけては、本稿の他の調査と同じく右肩下がりに減っている。これは他の調査と酷似していることがわかる。しかしながら、相違点は、中学年まで好きという度合いが減少しているが、その減少率は明らかに低い点である。他の調査結果と違う点は、中学年から高学年になる時点で起こっている。「好き」が急増したのだ。これは珍しい状況経過と言えよう。

一体何がこの小学校であったのか、想像することができなかった。校長に伺い原因が見えてきた。

校長は当該小学校へ今春着任されて、専門教科として「図画工作」研究も行っている。特筆すべき取り組みと

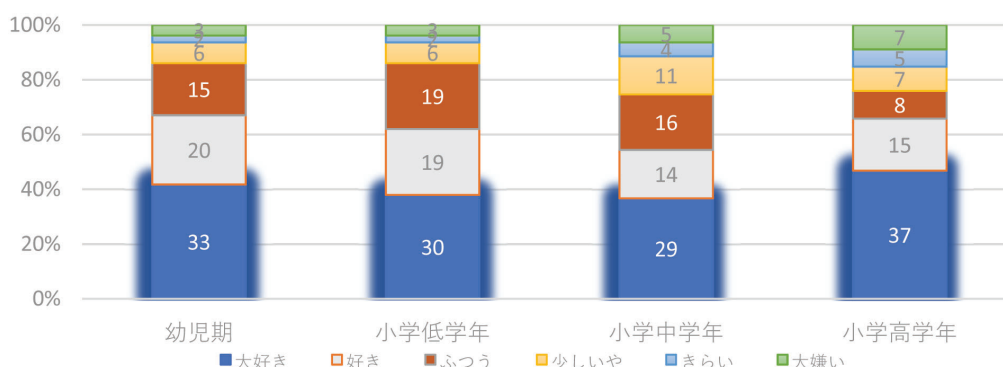


図 16. お絵かきに対する好悪についてのアンケート (2019 小学校 5 - 6 年生: 有効回答 79 人)

して、今年度 1 学期に愛知県と名古屋市が出資して開催している「トリエンナーレ」に参加校として取り組み、研究活動を実行している。本稿の調査前には、東京芸術大学教授を招いての「ダンボールアートのワークショップ」を開催したということである。なんと今年度は、「好き」な児童が急増しているではないか。ここに造形活動が好きになる有効な手段があるのではないだろうかと考えることができる。

ところが、上記の立体造形（ダンボールの W.S）ではない平面活動においては、ごく一部に以下のような声があることを知ることできる。

子どもたちの好悪状況を詳細に読み取ると、5 年生の中で 3 人のみが高学年で大嫌いに、2 人が嫌いにマークされていて、書かれた文言には「平面や絵の具」を使った活動が苦手であり、「色がまざってグチャグチャになるから。」など書かれていた。中学年の時期には「絵をうまくかけなくてたいへんだから。」というコメントをしている。6 年生の回答では、当時小学 4 年で、国語の絵を描いた作品展で、（今まさにギャングエイジと言われる年齢であり）自己の作品への批判や他者との比較をしてしまいがちである。「自分だけ下手で一生やりたくないと思った。」と書かれていて、ローウェンフェルドの描画発達理論にあるように、この時期は批判的な見方が表れる年代として重なっている。また「小 1 で、読書感想画がうまく描けなくて持ち帰ったときに、お母さんに笑われた。」と書いた児童もいた。きっと母親は、わが子の作品を見ていとおしく微笑んだのだと思うられるが、子どもの受け止め方とその記憶にも感服される。絵の具の表記は多く「色がまざってうまく描けない。」「絵の具のお絵かきで、他人と比べられるのがしんぱい。」「他人はほめられても、自分は上手にかけないからいや

だった。」など、立体などの工作系よりも明らかに、「絵を描く」という平面的な部分に苦手意識があることも理解できる。教師のあらゆる取り組みによって、他の調査よりも「お絵かきが嫌い」の比率が少なく、一般的な発達の流れの中でも、この小学校は好きな子どもが減少していない目が離せない小学校でもある。

4. 調査データの統合と解析

(浜松学院大学短期大学部 2009 - 2011 入学生: 425 人) (愛知県大治町立大治中学校 2011: 3 年生 38 人) (2013 名古屋柳城短期大学 1 年生: 有効回答 223 人) (2014 名古屋柳城短期大学 1 年生: 有効回答 203 人) (2015 名古屋柳城短期大学 1 年生: 有効回答 150 人) (2016 名古屋柳城短期大学 1 年生: 有効回答 211 人) (2017 名古屋柳城短期大学 1 年生: 有効回答 175 人) (2018 名古屋柳城短期大学 1 年生: 有効回答 165 人) (2015 N 女子大学 4 年生 101 名) (2016 N 女子大学 4 年生 121 人) (2017 N 女子大学 4 年生 61 人) (2018 N 女子大学 4 年生 39 人) 日本福祉大学子ども発達学部 1 年生: 205 人) (2019 幼稚園教諭免許更新講習にて: 有効回答 76 人) (2019 小学校 5 - 6 年生: 有効回答 79 人)

本稿のお絵かきの好悪に対するアンケート調査は計 2272 人からの回答を得て、幼児期からの記憶の中では、多くの人が「お絵かき」に対して苦手意識が増幅しているという事実を確認することができる。これらデータから抽出して、名古屋柳城短期大学 (2015 ~ 2018: 701 人)、N 女子大学 (2015 ~ 2018: 322 人)、日本福祉大学 (2018: 205 人) の総計 1228 人の好き (大好き + 好き) と嫌い (大嫌い + 嫌い) を総計してグラフ化した。

図 17 からは、幼児期からのお絵かきに対する好悪の心理について、好きな心理比率は確実に少なくなり、嫌いな心理比率は確実に増すことは間違いのない事実であることが分かった。そしてその好悪の心理である好悪感情は、中学生の段階で逆転をしている。ローウェンフェ

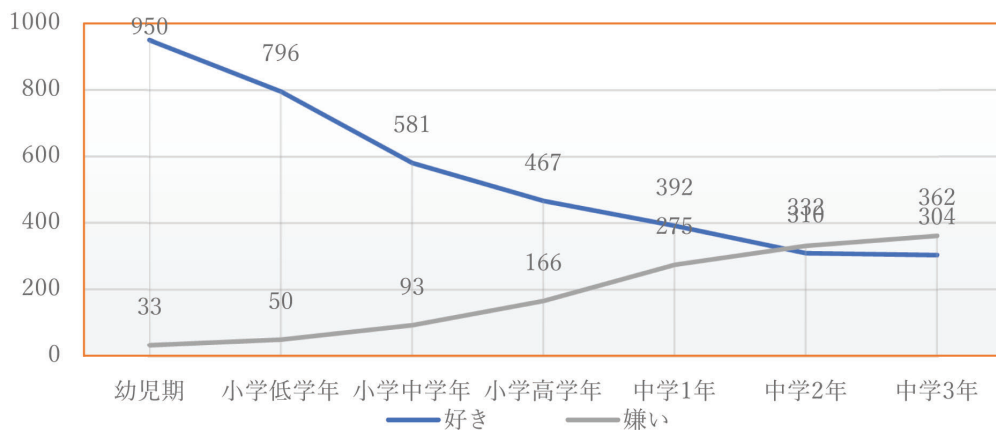


図 17. お絵かきに対する好悪心理 (2015～2018 名古屋柳城短期大学・N 女子大学・日本福祉大学の学生：1228 人の中の実数)

ルドによると、中学生という年齢は12才から15才までの疑似写実主義と呼ばれる時期から決定の時期という発達段階で、さらに視覚型・触覚型・その中間型の3つのグループに分類することができるという。本稿の中でも先述しているが、自分自身の「子どもっぽい行動反応」や「無統制の創造活動」いわゆる「子どもっぽい自我」に対して批判的になりがちである時期である。俗に言う「思春期の反抗期」と言えば分かりやすい。つまり、人の視覚的体験は認識と認知の領域に関しても広がって、自分の見たもの見えたものについての理解方式がこれまでから変化して、さらに正確に認知できるようになる段階である。それは、もちろん自分の描いた絵についてもそのとおりで、自分の描いた絵に対して、その作品と自分の描きたかったものとの違いが、よく分かり始める時期でもあるのだ。自分の描きたかったものが何かについては、イメージという言葉にて代弁することもできる。ここでは目の前にある風景であり人物であるなど、見た事象を記憶に留めての再構築という作業になるが、イメージの構築についてはさらに研究の幅が広がることになるので本章では割愛する。ギャングエイジと言われた数年前の自分の過去に描いた作品についても、それは本当に幼稚で下手に見えてしまうのだろう。同じ14才でも、発達の程度の違いが存在して、友人の作品を見て、「まるで子どもっぽい」などと言うことや、言われることはそんなに珍しくもない。描画の発達段階では、教育の現場に身を置いて子どもの描画指導を行った経験があればなおさら経験済みである。これらのこともきっかけとなって、お絵かきが次第に時には突然に、嫌いになるときが訪れるという時代であることも判明した。

浜谷(2015)は「絵を描くことに対する苦手意識の増加

と低年齢化の背景には、心理学的な理論が保育実践に与えた影響がある」として、例えば、保育現場で、子どもの描いた絵に対して、保育者がもっとも頻繁に発する言葉がけ、すなわち「なに(を描いたの)?」という問いかけが本稿の問題としている好悪を起こす最初の起因要因となりうることも理解ができる。この指示性・類似性を暗黙の前提としている場合が多いということからも理解することができる。子どもの描画が図式的様式的にも、何かを暗示して描かれていて、それが何かを描いたのか、保育者や大人または友達同士に理解されることは、この上ない喜びと描画の価値をそこに見出すのだろう。自分の描いた描画が認められるという自己尊厳の承認がされたような思いが起こっているのではないだろうか。そうして幸せな気持ちでさらに次の活動へつなげることができるというものである。

5. 新たな問題

本稿にて「人の発達に絡めての各年齢におけるお絵かきへの好悪感情の程度」については、2272人から回収したアンケートから見えてきた。これまでの先人たちの研究のそれらを追従することができたのではないだろうか。人間は、幼年期には大好きであった「お絵かき」が少しずつ、確実に「好きではない」心理状態へと変容してゆくのだ。そして、ある時期になると、あれほど好きであった「お絵かき」が嫌いになり、好きと嫌いの感情が数値的にも逆転してしまう。そういう「お絵かき」についての人が持つ好悪のネガティブな感情を確認することが出来た。

Luquet (1977) は、幼児の描画は知っている事を描こうとする「知的リアリズム」であり、7-8才程度が

らから発生するような、内面よりも視覚優位の「視覚的リアリズム」になっていくことを提言している。また、本稿でも先述した Freeman & Janikoun (1972) は、コップの実験により、見えていないけれども知っている事を書く様式から、8才程度からは、見えることを描こうとするようになるという事を証明している。松本ら(2018)は Luquet の研究より、幼児から児童期にかけて多く見られる知的写実性に対し、視覚的写実性は、大人に多く見られ、より実物に近い描写を求めるようになる、と整理している。また、その要因として「子どもの注意力」の発達と「自らの批判能力」が、経験を繰り返すにつれて知的写実性の救いがたい欠陥が自覚されていき、ついに子どもは描画の表現様式としての知的写実性を放棄するに至るとしている。これらは自然発生的に行われているということにもなっている。

この時期、いわゆる「ギャングエイジ」と重なる時期の子どもの心理状態は、毎日の生活の中での変容が、深くそして広く、または部分的に成長発達して、それぞれの自我と個性、そしてそれがその人の心身の成長と同じく個人のアイデンティティとして獲得されていくことは、お絵かきの発達においても推認できる。ところが新たに疑問が起こるのは、この「知的リアリズム」から「視覚的リアリズム」に移行する過程で、その起こる初期の段階では、または移行完了手前では、子どもの心理はどういう状態になっているのか具体的な実証を解読できるものはあまり見当たらない。特に、大人や教師の関わりについて、それらの変容が自然発生的に行われることが事実であれば、「教師の関わり」がなくても起こる事であり、教師のそれは必要がないということになる。こういう流れで、大人や教育者による介入や刺激は必要なく、自然発生的に「視覚的リアリズム」による描画が誕生するということであり、これが定説になって疑うことをしなくなっている状況でもある。この時期については、まだまだ今後の研究余地があると思うのである。香月(2018)は、幼児期の造形活動における他者からの評価について、中野(2002)の言葉を引用して「問題点は、幼児の造形表現の発達段階を無視して、大人の絵に近づけようとするにある。大人の視点で『上手』『下手』のみで判断したり」として問題提議しているが、幼児期についてはその通りである。しかし香月は同じ章で、日名子ら(2016)の言葉を引用して「学生自身が美術＝造形表現は、上手でなければならない、美しくなければな

らない、対象物を写實的に表現しなければならない、というような思考にとらわれている。」としている。これについては、《学生が思う美術》＝《造形表現》について、対象が曖昧であり前提として区別をしないで語ると齟齬がおこるのではないだろうかと考えられる。対象が幼児なのか、児童なのか、それとも大人なのかによって、これらの実証に賛同できるかどうかは、変わってくる。学生は幼児と違って18才以上である。ギャングエイジでもなく、模擬写実主義の時期でもなければ、もちろん推理の年齢でもないわけである。青年期の危機の時代は終わっているのが大学生である。つまり、大学生は「上手く描くことができたらいいいし、美しさを求めても何も問題がなく、対象物を写實的に表現したいと思って行動する時期でもあるのだ。」と言えよう。このあたりの解釈や、人間の発達状態のコンセンサスと描画発達などの学術内容との関連には多くの不備が見られる。対象物を写實的に表現したいと思っても、これまでの学校教育では教えてもらえていない訳で、欲しても充足できない教育、つまり「子ども自らの自然の力によって描けるようになるまで教師はただひたすら待つ、そして作品は評価をされる」教育を受けてきたのだから人の持つ本能的な欲求である「描く技能」を身に付けて義務教育を終えたのか測る術がない。それを知る指標として、「お絵かきに対する好悪心理」との相関があるのではないだろうか、関連付けて測ることができるのではないかと考えてしまうのである。このように中学校までの「図画工作・美術」の義務教育の成果として、「嫌いな心理状態」で修了するという、もどかしさがぬぐいきれないのである。

煤孫(1988)は、「9～13才のその時期は、世界中の美術教育の専門家がその対応に苦慮している時期でもある。」と訴えて、美術が苦手な学生をどうするかという章の中で、「遅れていた子どもでも時間をかけて自発的あるいは他人の力をかりて訓練していけば早いと言われていた子どもにおいつく」と結論付けている。本稿の筆者として、絵画教育の重要な問題として挙げるべきことは、煤孫が言う「子どもの願望に対して表現技術の教育が適切に行われていない、つまり、表現技術の訓練が系統だって充分に行われていないこと」を指摘している点であり実際にその通りである。しかしながら、この部分の「訓練」という言葉を使うことについては、芸術教育の子どもの造形にとって良いのかどうかは肯定しがたい文言でもある。しかしこの発達段階の人間は、全員が自

然発生的に「視覚的リアリズム」に移行してくると仮定しても、個々の内面ではそれなりの葛藤や挫折が内在していると考えられるのであり、ときにその苦しみから解放されたいがために「お絵かき」から離れてしまってきたという事実は、今回のアンケートから読み取ることができる。現状日本国内にある「お絵かきの好悪の研究」と「描画発達における子どもの心理的葛藤」「発達段階によっては、描き方を教えるか否か」などについて連携や連動した調査研究の存在が殆ど見られず、これから必要な研究であると考ええる。

小田(2001)の論稿にある、C. Burt(1921)によれば、「児童が発達段階における最後の段階について、大多数のものは最後の段階に到達しないで終わっていることを示唆している。」とあり「写実期というままで、発達においての研究も途絶えてしまう。子どもは成長すると自然にだんだん絵を描かなくなる。」とも言っていることが気になる。この発達段階の最後の段階における人間に、何が起きているのか、それ以前の、図式的様式から解放されて『どうしていいのかわからなくなったとき』に何が起きている、何かをする必要があるのかどうかについて調査と研究をする必要性と余地が充分に残っている。

6. 問題の提起・研究の方向について

岩野(1991)は、「世界の美術教育の中で、非常に優れた描画能力を有する子どもたちを育成するとされている日本の美術教育界であるが、その成果の報告の多くは外国の研究に任せられたままで、日本美術教育者自らの分析の報告を待たれる感が強いと感じられる。」と警鐘を鳴らしていることについては全く賛同する。

美術や造形の教育については促進や見守りはするけれど、教えてはいけないというふうを考えている教育者のいかに多いことか。同時にそういうふうにお教えられてきた子どもが図式的様式から脱却するための仕掛けもない教育現場で、刺激のないままに放任されて自然のままに、視覚的リアリズムの獲得することを是としている。これには、いささか難があるのではないのかという事を調査する必要がある。絵を描くことを拒絶する多くの青年期の様相を見て、やはりそうかと納得をして、青年期以降は絵を描かなくても良いという解釈で済ませている。美術の教育・研究者は責任を放棄しているのではないのかと思ってしまうのである。成長過程における「子ども

が抱く自己批判の嵐の中で、どのように成長していくのか、大人や教育者による仕掛けや刺激はどのようなものが必要なのか」という体系が幼児期には多くあるのに対して、ある時期を境に全く出来ていないという学問分野ではないか。それは、芸術という人間の行う最も未知の世界である「芸術学」と「心理学」及び「教育学」との連携が必要であると強く思うのである。現代の絵画教育は「楽しく＝自己肯定のために＝個性＝そのまま＝自由で良い＝上手く描く？ 必要がない お絵かきは嫌い」という心理分析の流れが成立している。

今研究のアンケート調査から、お絵かきが嫌いになるときはどのようなときかを質問をして、圧倒的に多い回答(理由)を以下にまとめてみた。

思い通りに描くことができない。

イメージがわからない。

他人と比較して自分の下手さが分かった。

友人、親、先生に笑われた、批判された、注意された。

展示された。

上記の理由が、人がお絵かきから離れ、嫌いになっていった大きな要因であるし、この要因を増長した環境によるものでもある。特に の理由では、どういう心理状態であるのかを想像するのは容易なことである。深層には「描きたい」という願望が存在しているの回答であり、「思ったように」はイメージしている完成予想のぼんやりとした感じである。だけど、出来ない(描けない)のである。そのイメージに近づけることさえもできずにいるし、当人にしてみればどれだけ歯がゆく残酷な時間が過ぎていることであろうか。被験者自身にとっては、これを解決する手段も手立てもなく、インターネットを閲覧しても何処にも存在しない。まして誰かに助けを求めてもいわゆる解決手段としての「描き方」は誰も教えてくれない。本来であれば教科の指導者である教師に「本望の解決策」である「描き方」を教えてもらうということが理想でもあるのだが、「そのままでもいい、それが個性だからね。」と言われて解決されることがない。本人の渴望している「思い通りに描く方法や手段の獲得」は目的を「必要なし」とずらされて、結局は解決されることはない。結幕は「描かなくていいんだなあ。とっても楽だなあ。」と自己解釈して「目的を達成するための手法獲得を放棄して」あげくの果ては「芸術の世界は素晴らしい?!」という事になるのである。ところが、教師

による採点では、しっかり「上手・下手・態度」でしか理解できないような評価になっていて、成績を友人同士で交換して見せ合ったりした子どもたちは「図工・美術嫌い」になることを増長していく現実に再直面するのである。根底には「上手になりたい」と思うのが自然発生的な成長に見られる段階であり流れである。

ところが立場が違って最初から上手く描ける子どもや描く技能に長けている子どもが、これを聞くと「上手く描かなくてもいいよ。自由に好きに描いてね。」と教師に言われて、上手く描きたいと思う事が良くないことと解釈してしまい、動揺して悩むのである。

果たして「芸術」は教えない教科なのだろうか。哲学的・美学的な問題を提言することはここではしたくないが、例えば「音楽」は歴然とした芸術の分野であり自由な素晴らしい世界である。その「音楽」については、美術と同じように、子どもの絵画教育において「描き方を教えない」方式では成立しない。基本的には設計図である楽譜が存在し、これを踏襲して再現する行為、つまり「演奏」であり「歌唱」なのである（作曲等については、別次元の問題）が、音階やリズムなどのついで知識を理解することから始まり、時には身体的な動きと同調して、歌ったり演奏するのである。児童期に音楽が得意な子どものほとんどは、ピアノやオルガンを幼少期から習っている場合が多い。つまり、上手く弾くためにはトレーニングを受けることは是とされて一般化されているし、特段の例外を除いては歌を何度も歌って練習している。また、もう一つの芸術分野である「書道」はどうだろうか。例外もなくしっかりと練習がされている。そして「書写」という技能の練習方法が確立されて久しい。時には教師が子どもに限らず書く人の手首を取り支えて「書き方」を伝授しているのだ。

当たりまえではあるが「美術」については、そうはいかない。「自由でいいから、何でも描いて。」と言われて描かない生徒が教師から「自由でいいのに、なぜ描かないの？」と注意されることも少なくないのである。繰り返すが結果として「自由でいいと言われて、描いたのにそうじゃない。」と指導されたり、なかなか描くことが苦手な生徒に「上手くなくてもそのままでもいいじゃない。個性的だよな。」と言われて褒めてもいただいたのに「成績が下げられて嫌いになった。」と思い出して語る学生は少なくない。図画工作科や美術科という教科の評価については「人の数だけ答えがある教科なので、描き方

は教えないし教える必要性もない教科である。」しながら「自由でいいよ、と言われ続け、みんな違っていいから、で済まされて、自然発生的に上手くなることを教師は待っている状況」が美術教育の現状である。

事実として明言出来ることは、ある時期が過ぎた児童と青年期の生徒や大人はみんな何を言われても「上手く描きたい」のである。「上手に描きたいと思うな、上手に描かなくてもいいからね。」と言われてその場では、労われて救われた気持ちになったかもしれないが、結果は何も進歩がなく問題は解決できていないのである。先行研究によって肯定されていることは、大人になるに従い「作品」として皆に認められる作品にしたいということである。描きたいのに描かなくてもいいよって安心させておいて、成績はしっかりと下げるという「児童生徒の失望の現状」を教師は知らないのである。上手い下手は関係ないからねと言える対象は限定されていて、先述した一部の段階の子どもたちにだけ言える言葉であるのだ。

今研究によって明らかになったことは、ほとんどの『子どもは「上手く」描きたいのに描けないという事が重なり負の経験が重複して嫌いになっていく』ということである。気休めの言葉で「自由だからどんな絵でもいいし、大丈夫大丈夫」と言われても、「下手でいいから」「違って当然だから」と言われてもその場しのぎであって、何も解決にはなっていないことがわかった。悩んでいる子どもの気持ちが楽になるという文言ではある。それは慰めの言葉かけであり、一時しのぎの指導援助でもある。悩む児童生徒に向けての正解の言葉掛けとして正当化されすぎてはいないだろうか。現状の一般化された指導援助の方法では、人間の本能的欲求は満たされることはない。そしてその「上手く描く方法」については誰からも教えてもらってはいけない教科観があることも事実なのである。解決すべき問題は山積みである。

アルンハイム（1969）は、「視覚的な訓練が、現代の教育ではほとんど無視されている。」と強く批判している。さらに言えば、子どものとき描画で絵画シンボルの体系を使う練習をしておくと、その後つづく数学や書き言葉のような他の表象体系の獲得と使用を促進するかもしれないと提示した研究もある。

7. 最後に

人はなぜお絵かきをするのだろうか、という問いに対

しての回答を獲得するまでには本稿によっても解決されることはできない。「人が絵をかく」ことと、「人が絵をかくことが好きではなくなっていく過程や状況」との相関についてはある程度、明らかになった。現状の発達理論や心理学的側面などへの新たな提言も加味しているが、「人の成長発達の過程では、描画（お絵描き）が嫌いになっていくことの是非」については未解決でもある。その要因や原因を調べてみたものの、そもそもお絵かきをする事自体『嫌いになることが悪い』という立ち位置からの研究であり、嫌いになって何故悪いのかという逆説の問いには答えられない。

ローウェンフェルドの理論に回帰するが、人間の描画発達に於いて、自我の意識が自己肯定を促すためには自分が描いた「絵：作品」に満足する手立ての方法確立が必要である。現代の国内の美術教育の在り方については、幼児期から初期児童期にある様式から脱却していく時期の絵画教育の在り方、その後の方法についての美術教育が幼児期と同様であることの功罪が及ぼす弊害について明らかになったと考える。誰もが抱く「上手く描きたい」という渴望にそれを否定することなく、描画への最大の欲望である人間の本能的な営みでもある描画方法の研究は未開であり、今後も継続して明らかにする必要がある。

【謝辞】

- ・本稿のためにアンケートに協力をして下さい、愛知県津島市立高台寺小学校の5年生6年生の児童の皆様と先生方、ご了承いただいた浅尾知子校長に心よりお礼申し上げます。
- ・2011 - 2019 のそれぞれの期間（浜松学院大学短期大学部、名古屋柳城短期大学、名古屋女子大学、日本福祉大学子ども発達学部）の学生の皆様、2019 教員免許更新講習会にてご協力頂いた皆様、2011 - 2012 年当時：浜松学院大学短期大学部研究紀要に調査して掲載した静岡県立文化芸術大学の皆様、及び愛知県大治町立大治中学校当時3年生の皆様へは心よりお礼申し上げます。

【引用・参考文献】

- ・浜谷直人。「描画発達理論を拡張する」心理科学第36巻第1号：pp. 1-9, 2015.
- ・Herbert Read. 「Education Through Art」訳：宮脇理，岩崎清，直江俊雄．フィルムアート社．2001
- ・Viktor Lowenfeld. 「CREATIVE AND MENTAL

- GROWTH, 3rd Edition」訳：竹内清，堀内敏．黎明書房．1964 初版
- ・Freeman & Janikoun. 「Intellectual realism in children's features」Child Development, 43 : pp. 1116-1121, 1972
- ・Luquet, G. H. (1927) 「Le desir de l'enfant (reprint 1977). Paris」: Delachaux & Niestle.
- ・松本美里，高橋敏之．「幼児期における模写の活動の教育的妥当性と近接領域の研究動向」美術教育学研究第50号：pp. 321-328, 2018
- ・香月欣浩．「幼少期のものをつくることや絵を描くことに対する他者からの評価が，その後の造形表現の『好き』『嫌い』に与える影響」美術教育学研究第50号：pp. 145-152, 2018
- ・中野友三．「幼児造形表現の見方，育て方」比治山大学短期大学部紀要37：pp. 17-26, 2002
- ・日名子孝三，長谷川悦子．「造形表現に於けるイメージ展開と苦手意識について」文芸学院大学人間学部研究紀要17：pp. 1-12, 2016
- ・煤孫康二．「美術が苦手な小学校の先生をなくそう」岩手大学教育学部附属教育学センター教育学研究第10号：pp. 31-41, 1988
- ・小田久美子．「子どもの描画研究とその周辺領域」美術教育，vol. 283 : pp. 67-73, 2001
- ・C. Burt. Mental and Scholastic Tests. (1921)
- ・岩野雅子．「子供の描画研究における今日的課題に関する一考察」美術科教育学会誌12巻：pp. 47-56, 1991
- ・Arnheim, R. 「Visual Thinking, London」Faber & Faber. 1969
- ・松下明生．「子どものお絵かきの嫌いになるとき」浜松学院大学短期大学部研究論集第8号：pp. 31-48, 2012
- ・松下明生．「子どもの図画教育の指導法研究」（保育所・幼稚園・小学校における描画教育の新しい価値観）浜松学院大学短期大学部研究論集第9号：pp. 23-37, 2013
- ・松下明生．「図画工作科における絵画制作及び描画学習の知的貢献についての研究」名古屋柳城短期大学研究紀要36：pp. 141-157, 2014
- ・東京藝術大学美術研究室編．「美術と教育のあいだ」東京藝術大学出版会．2011
- ・Glyn V. Thomas / Angele M. J. Silk. 「An introduction to the psychology of children's drawings」監訳：中川作一．法政大学出版局．1996
- ・仲谷洋平，藤本紘一編．「美と造形の心理学」北大路書房．1993 初版